



生涯学習市民講座から市民活動への展開

～自分史をつなぎ見えてくる地域の歴史と未来へのバトン～

語り手：北九州市立西門司市民センター 館長 渡辺いづみ
聞き手：北九州市門司区役所 地域・人づくりアドバイザー（社会教育主事） 山本 聡子

山本：西門司市民センターでは昨年度、生涯学習市民講座として聞き書き講座を開催。そこから自主活動へ移行し、まとめた原稿を証言集『聞き書きでのこす門司の記憶 未来への伝言』として発刊されました。聞き書きに取り組まれたきっかけや思いを聞かせてください。

渡辺：はい。現在私たちが日々眺めている風景からは想像もつかないことですが、門司は昭和20年に空襲^{*1}、28年に大水害^{*2}の被害に遭っています。そしてその体験者が現在も地域に暮らしていますが、戦後77年を迎えた今、その事実は当事者の記憶とともに風化していこうとしています。地域の歴史的事実を忘れないために私たちにできることはないかと考え、聞き書きでのこしていくことにしました。

聞き書きをするにあたり、生涯学習・社会システム研究者の三浦清一郎先生を講師に招き、全3回の「ともがき講座」を開催しました。講座には大学生2人を含め、30代から80代までの15人が参加し、「ともに学び、ともに書く」を合言葉に、人生を書きのこすことの意義や聞き書きボランティアの重要性を学びました。そして、戦争体験、水害体験、西門司校区の歴史、門司港レトロ事業の4つのテーマに絞って地域の歴史証言者を招き、4グループで1時間の聞き書きの実践をしました。

講座はそこで終了したのですが、その後「ともがき隊」として自主活動に移行し、聞き書きを文章化していく作業を進めました。同時に新たな証言者の掘り起こしも行い、合計12編の体験談を編集しました。原稿を仕上げるまでのたいへんな作業は仲間と一緒にだからできることであり、まさに合言葉の「ともに学び、ともに書く」を体現したものだだと思います。



山本：素晴らしい取り組みですね。そうしてできた『未来への伝言』は、名前の通り、若い世代、未来へとこのこっていくものになったと思います。

渡辺：ありがとうございます。700部刊行した証言集は、門司区内の市民センターや小中学校の他、市内外の図書館にも無償配布しました。また、新聞等で報道されたこともあり、市内外からも多くの反響をいただいています。

※1 昭和20年6月28日深夜から29日未明にかけて、門司市（現北九州市門司区）は激しい空襲にあい、同年7月2日の空襲を含め、約1万8千人が被災した。

※2 昭和28年6月28日に発生した北九州大水害により門司市（当時）は、死者・行方不明者143人を含め、620人が死傷。被災戸数は1万4千戸以上となった。

山本：「証言集発刊記念座談会」を、戦災と水害の日である6月28日に行ったことにも、意義があると思いました。私も同席させていただきましたが、聞き手から語り手への冊子贈呈のシーンや、意見交換でのみなさんの発言が、とても印象に残っています。語り手、聞き手、相互の学び合いの様子が感じられ、「学び合い、育ち合う」社会教育の姿が体现されていると思いました。ただ聞いて、書いて終わりではなく、証言集という形にまとめられたこと、座談会というアウトプットの間を設けられたことが大きかったと思います。



渡辺：そうですね。贈呈された冊子を見て、自分の拙い話がこんなにきちんとした形になるなんて、とみなさん喜んでくださいました。「人々が育んできた歴史が地域をつくっている」という語り手の方の発言にあったように、まとめられた自分史をつなぐことで、そこに新たな地域史を描くことができました。それが1人1人の過去を肯定し、自己肯定につながったのではないかと思います。

また、座談会の参加者の方からは、「小さな講座から始まり、着実に語り手と聞き手の人材が増えていき、学び合っている姿が、生涯学習・社会教育のあるべきカタチを体现されていると思った」という意見もいただき、この取り組みの意義を再認識することもできました。

冊子ができたことで、語りつぐ必要性を感じ、80才を超えた方々が更に元気に、意欲的になっていることも喜びの一つです。座談会後には、語り手からの「関門の海に向けて被災者を悼む会をしたい」との申し出を受けて実行委員会を結成し、門司区の大里海岸で慰霊祭を行うこともできました。司会進行や慰霊の言葉は大学生が行い、発案者による尺八の演奏も披露されました。

山本：とても厳かな雰囲気での慰霊祭でしたね。夕陽を受けながら海に向かって献花をしたシーンが、とても印象に残っています。慰霊祭には聞き手として活動に参加した職員やコーディネーターの小学生のお子さんたちも参加されていました。次世代へと引き継がれる会になりましたね。

渡辺：そうですね。風化していく歴史的事実を、どのように次世代へ伝えのこしていくことができるかが、大きな課題だと思っています。今回その活動の展開として、子ども講座に



語り手を招き、子ども達に地域の歴史を語ってもらい、世代間の交流を図る“地域で育もう「未来の種」事業”^{※3}につなげました。自分たちの育った地域やその歴史を知ること、子どもたちが過去から未来へ続く歴史の中にいることを感じられる機会になればと企画しました。これにより、自分史講座から始まった一連の活動が、子ども達に未来へのバトンをつなげる活動になったと思います。



山本:“地域で育もう「未来の種」事業”は、地域の方達の「子ども達のために」「地域への愛着を育みたい」という思いが伝わってくるものでした。また、フィールドワークや交流を通して、子ども達が楽しみながら地域のことを学んでいく様子が印象的でした。講座で知った地域の人や歴史を、子ども達が親や友達に語ることで、今度は自分たちがつなぎ手になっていってくれるのではないかと思います。

こうした聞き書きから子ども講座までの一連の取り組みを、西門司市民センターでは動画にしているのこされていますね。

渡辺:はい。コロナ禍の影響で、事業について対面で伝えていく機会が減っていることもあり、動画にすることを思い立ったのですが、動画にしてみても改めて、映像の力は大きいと感じました。実施当時の感動や思いは時間とともに薄れていってしまいますし、個人のもので終わってしまいます。それを動画にすることで、後々見た時にもその当時の思いが鮮やかに蘇り、当事者でない人たちにもリアルに伝えていくことができると感じました。

山本:動画を拝見しましたが、座談会や慰霊祭の様子その他、語り手や聞き手の発言をそのまま映すことで、説明用の資料映像とは違って、真に迫ってくるものになっていると感じました。実践事例の報告の新しい形として、今後広がっていくのではないかと思います。最後に、こうした取り組みの課題や今後の展開について聞かせてください。

渡辺:はい。教科書に載っていない歴史の体験者から直に話を聞くにはタイムリミットがあります。多くの人、特に若い世代に地域史に関心を持ってもらい、活動に参加することの意義を伝えていくにはどうしたらいいのか。平和学習という優先順位が高まりにくいものだからこそ、その情報発信の方法や世代間交流のあり方についても、持続可能な形を模索していかななくてはいけないと思っています。

山本:私もこの場を共有させていただいた当事者の1人として、一緒に考えていきたいと思えます。ありがとうございました。

※3 “地域で育もう「未来の種」事業”：北九州市の市民太陽光発電所・市民還元事業。市民センターや地域団体を主体に、子育て支援団体、NPO等のノウハウを活用し、子どもたちの健全な発達、育成を促す事業。内容は実施主体がそれぞれ決定する。西門司市民センターでは“西門司たんけん隊「じーもクラブ」”を実施。